真書

西郷隆盛一代記

羽田冨次郎著

五

A446
5と

羽田富次郎編輯
村井静馬圖画

真書 西郷隆盛一代記 五

明治十一年
九月發兌

浦野氏校

予元来戯作を好み少〻作者振りして扨へ小向へども素より
筆愚筆ハ在るべき走り書きすることを得ぬ丑年より魯
鈍編〻ける西郷が一代記幸ひ後を綴るとよと千里一足
寅の年當春書屋が催促ハ和漢へ求め〻少みる彼隆
盛が旅の空水府へ在〻を千住へ走ら〻勇天が仇討より藤
田が功を〻ゆうりの色ハ桂大人小志野へ情け可畏も堅
氏君の退助君小金ヶ原の豪傑より又隆盛が京地へ
あるむ氏月照老との物語り梓ハ彫りて婦女童蒙が長
き日蔭の伽とする

明治十一年
寅の皐月

笑門舎福来述

逢坂月照
迫て薩の
浦和ふ水
溺死せ

再ひ説物の茂木浦重蔵い馬方野中の松六を殺せしが水府の英士藤田小四郎が友人千草の太郎小見咎めを後の患ひと思ひろん千草をも除んとせしを早くも千草是をさつし偽り謀つて刀の誓丁ゐし重蔵を伴ひて酒店へ誘引三盃を迴らしつ四方山の咄しに及びしが言葉の端と言心を付てよく聞に日頃藤田殿より頼まるゝ勇天小志野が仇人わるゝ重蔵に紛れなくと至急水府へ状を送りしゝが藤田是を聞き見て勇天小志野に知らせ仇打の手配りを定め見届けの役として藤田小四郎柴柴小水主其余究竟の者三十五名西郷桂氏小

へ速隠ぶに付添つ頃い嘉永元極月中旬水府を発足なし千住の驛へと急ぎろり爰に又千草の太郎い茂木浦を見付しより藤田が方へ便を走らし勇天小志野を招いて重蔵を討せんと思ひしうべ彼を走らせしと片時も早りと離るゝ水府よりの人々を待けるが其日い朝まだ明よりして雪いさく降り出しを幸ひに千草重蔵を謀り雪見と号して彼を連出し千住小塚原仕置場の辺へ至りし時動下くとして人在重蔵一人を中へ包みしうべ是勇天小志野に親の仇と名乗しうべ重蔵聞て退ぞぬ所と思ひろん尋常に勝負を決せんと双方

共小紋合暫時の突戰雄雄ざかざりしが流石女の甲斐なき死小や小志野が切先乱れし時茂木浦得さりと踏込を勇天見るふ気をいらち後ろの方より重藏が肩先のぶろふ切付しが茂木浦尚もひるまづして一刀志ろと撃へ小志野が腕を引掴み我手小豁らを揉うべと突立倒しつゝ勇天小志野其餘の人愕然として在し時重藏苦敷声音を発し女まて甥よ姪小志野双を止めて今暫時死る今端小此伯父が身の詭解の物語り一通聞て下せ〻何とも様元我こそハ長州にて篠原藤左エ門が二男と生を身性悪さ小十四の時親兄弟小甚重さと親類縁者小疎まれ所小ころげ込古郷の空も喰詰て東の方へ端徳寺忘れ去へ今月今宵十七年の跡の工所も違ふね雪の夜小幼き二人を連さり一人の旅人を殺害し多く金を奪ひ取りしや知れと思へども天知る地知る我身の悪事已小此身も危ふ身の罪咎をあらはして人の悪度を探索なを隠し目付と也迫幕府よりの秘命を受京地へ力を盡さ也し有志の者在べ探索なして住進せよと仰を受て此程ろら水府へ久敷目明しと姿を替て居所しもあつと小志野が色香小迷ひ鬼越峠へ連出し口説落して呉んぞと思ひし

るのを思ひきや野中の松が計らずも我積悪を云募り早くも小志野が聞取りて親の仇篠原が娘なりと名乗りを聞て恟り胸に釘牧に千住で殺しゐる現在血を分兄なりと初めて知つて恥しや姪とも知らぜ仇心なし心の迷ひ九悩の犬にも劣る畜生どうぜん直に其場で討ぜんと思しかども弟のあるこゝ聞べ兄弟とも双を揃へて討ぜんと今日迫命を存命し重悪五逆の重蔵が五躰にかゝる節々を一寸たやしに切ぜなば死ぶ兄貴も草葉にて少しも悦びはまらんと汝に二人が手に掛り死なんと思ひ今日迫命を待に甲斐あり真此如

く能も討たる孝子者是といふのも諸君に皆助けに寄るものなれば勇天死しても此厚志必ず共に忘るゝなと聞に勇天慨歎なしいろでうに此御恩我身を終るとも忘るゝ死さい言實の伯父なるを知ぬことい言ながら斯迫罪に行へし我身の咎ぞ恐ろしいといへば志のも涙だと拂ひ妾に二人の兄弟に幼雅なたよりとや別ぜの初めにて斯浅間敷御姿を見る育ても無情なや篤より今死の御心ならんなとにはなるまでと歎くを聞て重蔵に廣に世界に兄弟迎なつた一人の此伯父

の生根が悪さに汝に憂目を撒る不便さよ免したまつると可愛やのう斯在ませし五郎殿世に便り無篠原の娘不束の者にあるなれども行末長く添とけてうべ願ひ升又今あらしも語り如く幕府の詮議厳なるべば隆盛殿に少しも早く落させ玉つると言置とい是限り何とも さらばさらばと黄泉に急ぐうんと言べ左右に取さぐる甥と姪とを押ひ除左手の腹に突立て又右手へ引廻らし又ものを抜つ取り直し咽のとうき切てあへなく息い絶かりし勇天小志野い今更に覚語い兼て極めても爰に頼を失ひし憂身のうくと泣暮を年の終や魂祭り外に立る門松も冥土の旅の一里塚行て返らぬ哀別離苦外に見る四の人くも数行の涙ぞふるる暮に牧あるべきにまさらさるべば勇天小志のい泣くも伯父が亡骸と葬りつ念仏数経唱へし後岩田西郷と初め其上の人く厚く一礼を述又拝氏に姉小志野う身の上を吳くも頼く置て其身い又再び布施野く里へ戻りる斯て桂大人に重蔵勇天が頼に應し藝妓小志のが坐敷勤を引しめ行末長く厚き情けを撒けらるべしといふ是皆こしの勇天が至孝神仏も感應在まし斯英傑の助け に逢志め賜よるらんう實に忘るべきるい忠

白狐

重藏討ると
て身の論
解けを孝子
ふうわる

孝の二字なるべしとあらずして牧置て爰ニ西郷氏ハ兼て重蔵が今死の刻ニ至り身の危きを知らせしうゑも元より不敵の性とゝひ殊更水府の豪傑と交り厚く若支あらば諸共ニ切て出んと誓約なし爰ニ居を落付て其年の水府へ春を向ひ明るべ嘉永二年ニなりしが爰ニ又下総國小金ヶ原ニ近来鬼鹿毛とゝもいへべたあく獣生して友なる野馬を取り喰ひ或ハ旅人を悩し呼の患ひを訴しゝ代官林部源太左エ門幕府の命ニ依りうの猛獣を狩取べしと同年三月十五日四方ニ竹垣を出来朝ぎぐらより狩せんとなるべ遠近の老若見物なくんと

往来掃の塵を引が如く此支を聞傳へ水府ニあるし西郷桂氏ニなる今日狩くらを見物なくんと数万の見物と交り今や悪獣を狩とらんとなるを呑んで待居るを折とて数多の人歩ハ貝金太鼓を打鳴し割竹を持て惣林の水の間くをわけ野馬を初め数多の獣物彼方此所と飛来るを狩せんとなる猛獣の未だ爰ニ出ざらねば狩山深く狩り立しが一下村茂る茂蔭ニ苦滑うなる谷あいありて其深さ数十丈といふを支を知らぬ雲霧おひたる谷底ニ鬼鹿毛鳥獣を取食ひ死骸を積重ね両眼鏡の如くにしてあるをハ馬士人歩を初め鉄炮

持て討掛るゞも蹄を揃て受留猛々然として怒りを顯し
し戎丈の谷底より身を踊らし一つ飛で出人足ホを蹄ま
うみて蹴散せば是が為ホ身を損のゝ者うづを知らぬ馬
士も今ハ倦労と一人うつとも手を下さず鬼うげ去たりホ
嘶き狂ひ見物の方へ飛行ハ貴餓の老若大ひホ驚き東
西ホ走り南北へ散り其騒動大方ならぬ男の涌が如く
此時遥ホ向ふなる樹林の小蔭より一固の豪傑顯を出
身ホ荒衣を着せども想貌堂々として鬼うげを見るよ
りも韋駄天の如く走り来り大手を廣げ無手と組見る
まゝひらりと身を踊らせ荒なる馬ホ跨がりて十間斗

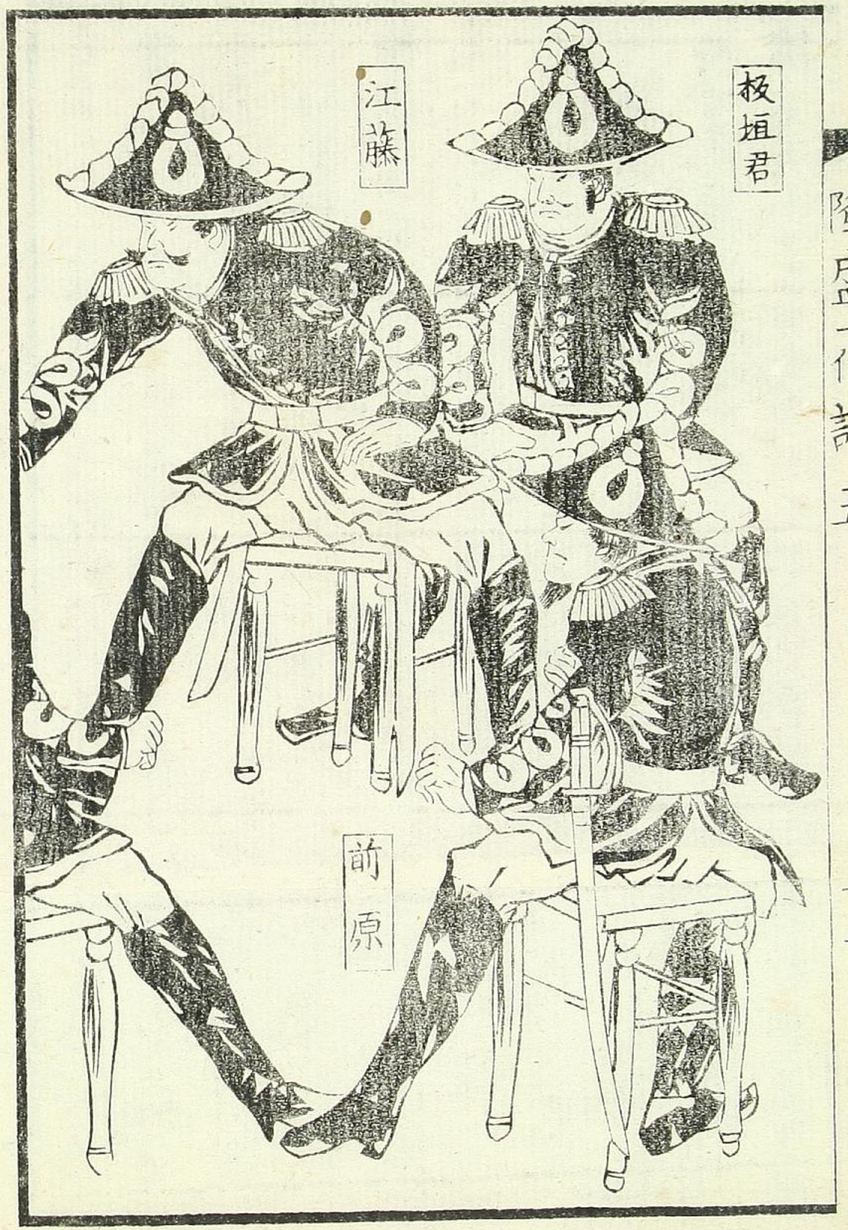
乗り廻らし貴賤の見物思ひすも得さりやうと同音ホ
鳴響でぞ讃ホうりこの豪傑ハ林部ゟ前へ下立て一礼ゟ
せハ代官も又ゟいを返し其強勇と賞美しつ感歎ホ
てゟる折見物ゟる西郷桂氏も此所へ来りて其荒馬
を能見ホ惣身紅ひの毛を生し眼中真白ホして鏡の如
く四足の蹄ハ美敷是正〻猩々栗毛と呼び名馬ホハ
あるべくも裾門と呼ぶ胸の當りホ渦巻し三ツの毛を生ぜ
此馬をして飼ふ者あらハ必ゟ吉も其主ホ禍を釀ゟと
私言ゟる時彼豪傑も代官へ暇を告立去らんとゟるゟり
しと西郷桂氏早くも呼びとめ懇志を結び互ホ性名を

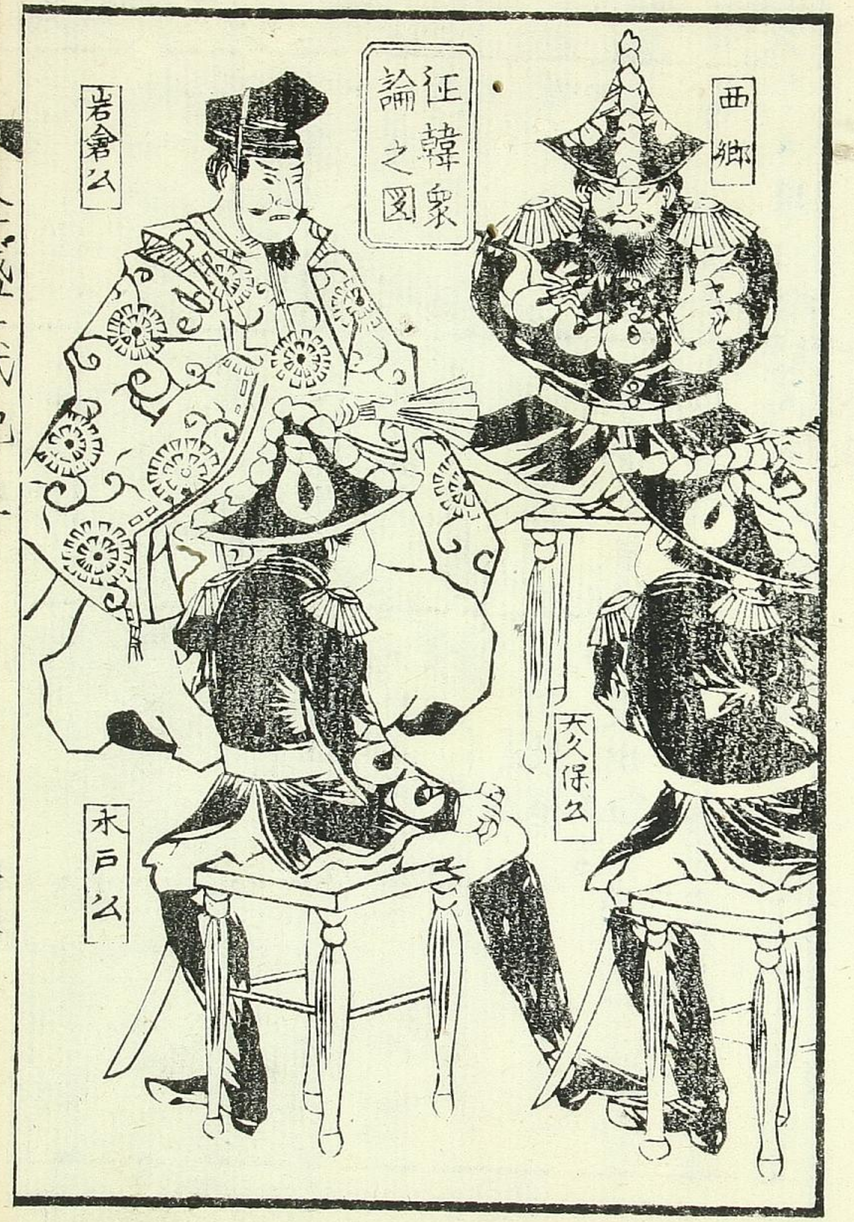
名乗りしうべ是別人なるべて板垣退助君なるべ両人大に悦ひて今日の功を賞し武辺の咄しより幕府の暴政を語り朝廷の御衰運を歎ぜしうべ退助君も又両士ど説く所と同し勤王の志しをうけり三名後の謀議を示し合再會の後を約して爰に袂を別ちり斯て西郷氏ハ西勇ハ別としより京地をさして出そうとしが其頃清水の法性院ハ月照と云る僧ありしが蜜ハきうを関ド屢〻王革る志しあり殊更近衛公の御眷厚き者なりと西郷聞及びしうバ此僧こそ我片腕とも頼むべしと一日便宜を求めて月照を訪らしが彼ど説く所西郷が心ハ叶ひ其後ハ心腹を明し合朝廷へ粉骨を尽さんと屢〻支を謀りり実ハ光陰の止らぬ星霜押移りて頃ハ安政五年の秋尾張水戸越前の君京地へ力を尽さんとしり幕府早くも探索を入らるる三君へ謹錮々命を朝廷此事を義し玉ひ幕府へ書を下し其情を責玉ひて水戸へ幕政を参輔せしむべの勅書を認め近衛公水府へ報知なさんと月照へ此使を命せらるしが月照又此書を西郷へ頼〻しうど彼ハ先ハ水府へ在りて未支のならざると知るハ辭をとも月照聞さるべ其意ハ任して水府の方へ趣向しが按ハ違ひなをこの成ざ

をば再ひ京地へ戻り月照へ書を戻し久卿の家臣海江田信治伊地知正治と共に京地の振ハざるを歎ク尚又後を謀りしに何しろ幕府此情を知り老中間部詮勝と京都所司代酒井忠伐に命じ前内大臣三條實萬卿をして髪をけづらしめ水戸の正伐黨久卿の家臣有志の面々を執閉ゐさしめたも月照に幕府の探索嚴敷近衛公ゐも一入心配あらせらるを西郷海江田と計り月照を加籠に乗せ京地を落んとするに早くも幕府の捕手迫りしゆゑ西郷海江田一刀を拔發ち捕手ゐを追ひ拂ひ虎口を退きて大坂の川口より便船を求め長州赤間ヶ関に

に至り兼て勤王の志しある白石一郎を尋ね月照を囲隠くまらるるよう頼しゆゑ彼も又心を配りる元薩藩の士に條右門平野次郎に頼して月照をさつの米沢へ送らんと上陸せしが何とも関門嚴しくあて忍びがたしや思ひ切て野間の関より船を求め阿久根へ廻りり爰に又西郷は先に月照が落付先を尋ねと一先本國に至りしが藩吏幕府と心を合せ探索嚴重なるを月照を入ごた地なく詮方なく引返したる半途にて月照に行合ての爰に難義なるを語りて我菩提所へ至り方丈へ頼ゐて一両日は忍べども縣守の詮義嚴しく爰にも長

居出来羨しや西郷愁然として意なきこと半時斗り呼
我輩ハ薄命ふして國あるとも戻るに家あるとも入る
不能只此上ハ貴僧と伴ひ日州ふとそへ落行んとのべ
月照涙を拂ひいくしくも貴君の言りのうゑ日州へ
斯いふ死所生てきめふ逢よりハ死くて後朝廷へ忠義
を磨き奉らんとつふふ西勇投海の苦約を契り其時ふ
平野重助酒肴を携へ勝手の方より出るべ四人もろ
とも船ふ乗り頃ふ安政五年十月半寒月光くとして海上
を照し四人ふきりふ盃を傾け西郷月照を返り見て今
宵の宴ふ慷慨の談をもるも由無快樂の興こそよふを
と言しも心ハ大丈夫の胸の内にて押ておらるとてつと
憐れを催しくり其時月照身を起し船上へ出つ月を仰で
立あるるハ西郷も又表へ出互ふ手ふ手を取るるとを
平野重助そとそとハ少しも夢ふ白浪の水面ざんぶと
物音をるふ驚ふ救ひ揚んと竿取りのべ平ふ助け揚
しべ西郷ハ僅ふ蘇生ることも月照ハ支切て再び回ら
ざりしこそ憐れり爰ふ於て西郷ハ菊地源吾と改め
ぶ藩吏ハ物議を憚りて氏を琉球の大嶌へ流を西郷改
めて大嶌三右エ門といふ氏ハ是より先に有りて爰ふ
流さるゝ　と今度をいて三回と也因て此称あるるら


板垣君
江藤
前原

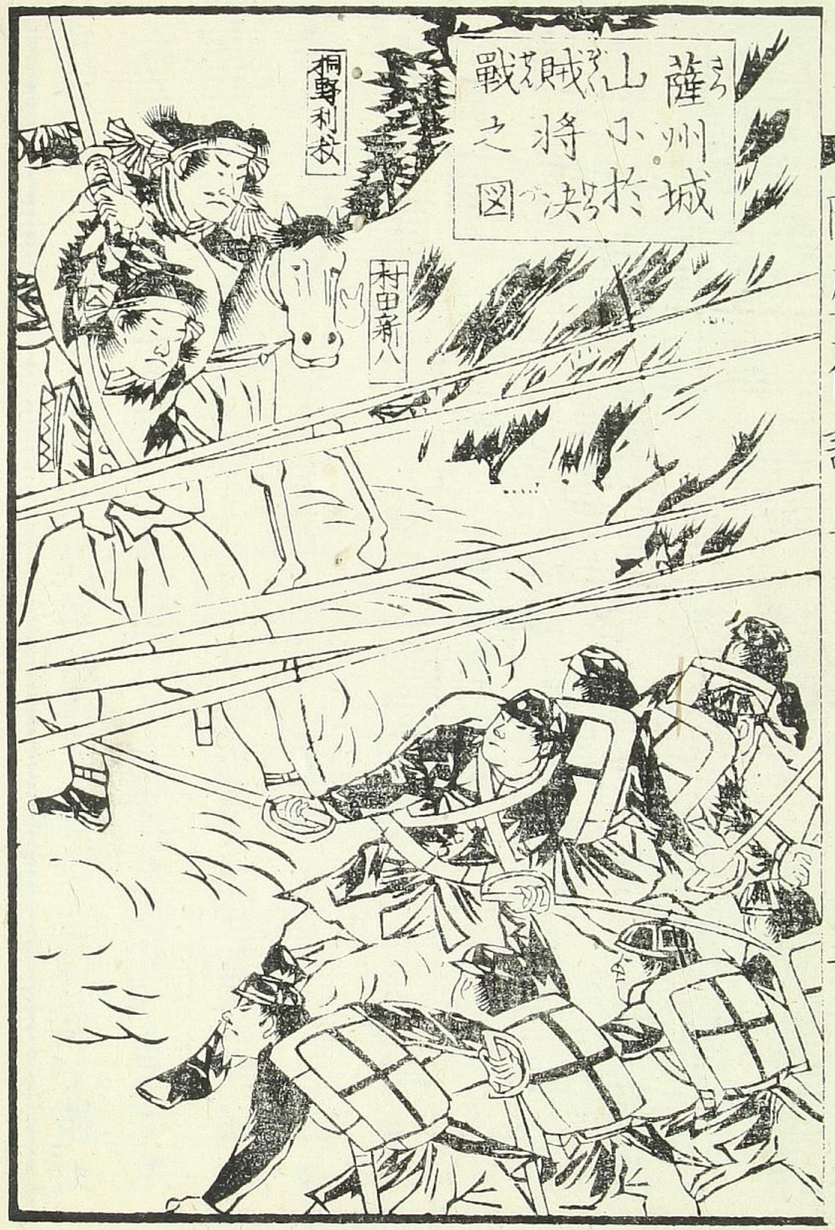

西郷
征韓衆論之図
岩倉公
大久保公
木戸公

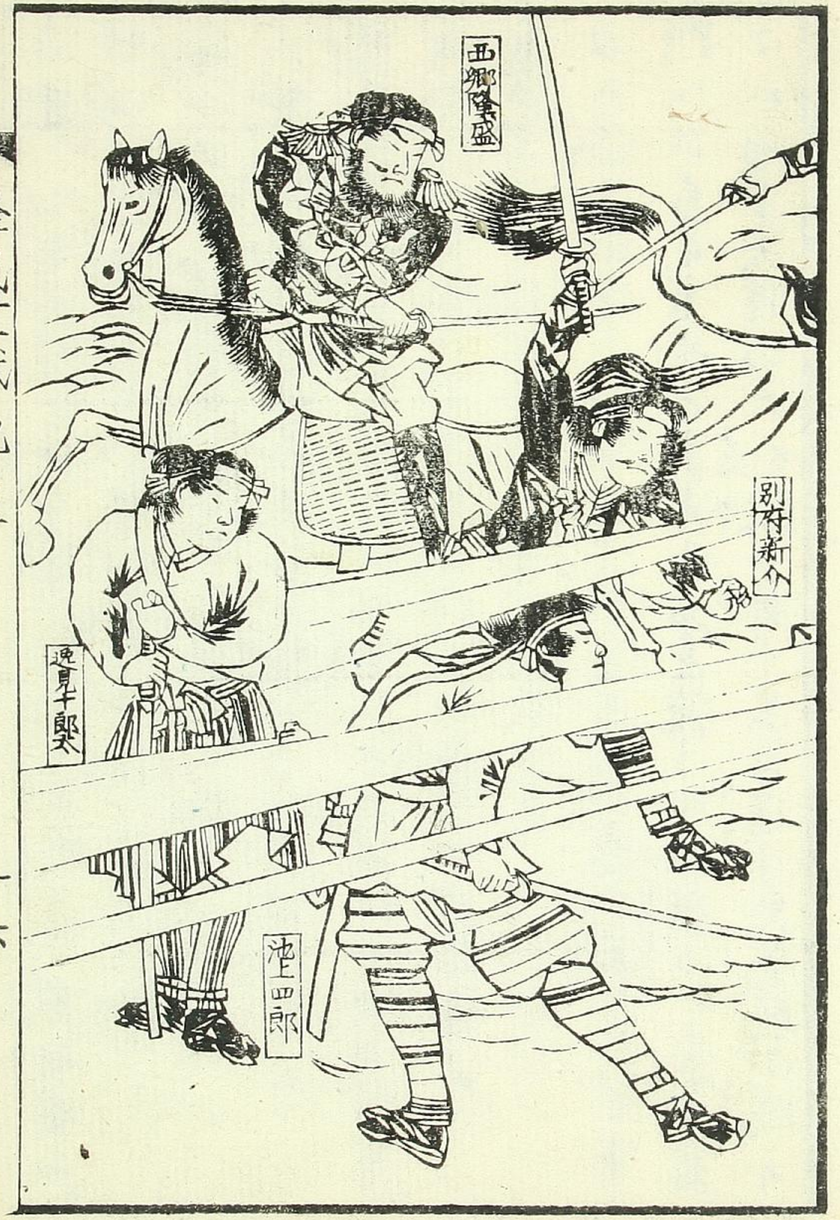
小嶌小ある支年餘小して身窮をとゝ性心堅く学術
に騁くとして進みけり然るに文久三年天朝幕府の間
小頗る議論を生し三條實美卿初めヒ卿西國へ下り長
門國宮市小在り三條公に同國の温泉へ行き従者原道
太を遣して西卿を長州へ招うんとせるとども船中風波
小逢ふて其便宜をえず道太虚しく帰ると聞くより薩
の藩吏西卿を赦免し国へ返し且抜擢して大参事を与へ藩
政を司さ取しむ慶應元年幕府長州征代の兵を返し支
平らく小及んで三條公に筑前小有幕府之を忌支甚敷
公を大坂へ押込んを此時西卿頗る人力を尽して此支

己を得さり幕府又各藩勤王の士を殺戮幽囚せんとす
るを西卿力に依て免るゝ者数を知らず幕府再び長
州を征るに当り氏に又蜜小長州へ使を遣して成ら
ざを行ハしむ是より薩長の交際日小親蜜なりしが未ざ
是を知らず同三年十二月氏に朝廷の大會議小参ず献
言の功頗る多く戊春官軍東征せるに当り西卿に参謀
官となり戦ひして徳川将軍の領位を還さしめ江戸城
へ入る上野の残賊を一挙小尽し大總督各藩の兵を江戸
へ置是を守らしむる等西卿氏の謀策小出さるに多し
且又越後を平ぐ東北己小治り朝廷将小氏を拝しさん美

小任ぜらるゝとして受ぜず遂に故郷へ帰る明治二年六月二日勅書ありて勤王の志浅からず大政復古の盛業を讃して終に参謀の命を奉じ東京を収めし後北越に発せ京に大功を奏し寝襟を安ぜしに依り賞典録二千石を賜ふ同四年正三位に叙し参議に任ぜ同六年五月陸軍大将大元帥の位に昇る十月征韓の議論起りて西郷不兵とゐりしを憤り官を辞して古多く退隠遠に慮りあるや賞典録を以て私学校を建生徒を集め経捷の進退を習ひ同国櫻篤に弾薬を製造せるを聞きくといふを知らず政府早くも此情を斗りて明治十年一

月三十日汽船を走らし彼製造場に貯へし弾薬を積取らんとせしに生徒凡二千餘人も出来り彼のゞん薬を取戻し尚偖て同年二月八日の夜各〻得物を携さへ鹿児嶋縣廳へ押寄せ暴挙に及び縣廳を奪ふとそこの福岡より傳報により東京にては至急征討の御用意あり諸官員の面〻数千艘の乗気に乗込み鹿児嶋地方へ急ぎ出でゝ然るに西郷隆盛は最初此暴徒に加はらざりしゞ止難き子細あるや尋問の筋ある迄兵器を携へ生徒数多随ひ上京せんと茂木浦迄至りしゞ官軍爰に遮ぎ止バ隆盛更に美論に及ばず憤然として此所を退


薩州城山賊徒小将決戦之図
桐野利秋
村田新八


西郷隆盛
別府新八
逸見十郎太
池田郎

き遂に桐野篠原と徒と結び西南の巨魁と也軍議速に
相決し會集の面々に軍令條を申渡す其文に曰
一總軍長の命を守り誠忠を抽で可申事
一同勢互に和順を本とし私に論を立候義相成ざる事
一陣軍並に行軍中人民の耕作商業を妨候儀不相成候事
一同勢沉勇を本とし浮薄軽跳の振舞不相成候事
一進退其度を得無謀の義有之間敷候事
右之條々相違し若軍法背く者あらば速に首を切て軍
門へさらす者也と高声に令を流し軍務厳うして隆盛
ふい陸軍大将の大礼服を着し黒き逞しき荒駒に股ぐ

り桐野利秋篠原国幹西郷同服に出立飼ふい〻る馬
に打乗其他一万五千餘人各〻身軽に立出頃は明治十
年二月十五日未だ消残る朝霜を踏新政厚徳と大字せ
し大旗を真先へ飛返し勢ひ堂〻として肥後国熊本城
を一挙に討破らんと同国川尻へ本陣を置隆盛鬼神不
思議の妙計を廻らし日官軍と合戦し屢〻勝利をへ
るとらざるも逆ふ順に敵せず隆盛遂に四月十四日俄に諸
隊と合し軍機輜重等を取束ね陣中清く掃除を尽日向
の国へ退き人吉の峡にありしが不日ならずして大隅へ
出豊後の佐伯竹田城に進入し又延岡城を落せども寡

に敵し難ぜず隆盛遂に又日向の切嶽山に陣を置くこと
ら〳〵味方の戰ひを見るに英気衰ひ粮乏しく所詮勝べ
からざるを知り何まで罪つくりに戰ひを望むより討死
せんとあり〳〵ども隆盛一身の置所なく日向の山莊に
亡びしと後世の誹りを恐れ一度鹿児嶋へ戻りて討死
なさんと軍令に及び頃は明治十年九月一日手勢ばかり
五百餘人を真先にまっしぐら猛然として鹿児嶋へ移陣せ官
軍方の手配薄きを伺ひ縣廳へ火を放ち新撰旅團の兵
を破り縣令を長崎へ退うしめ再び古郷へ戻りしは恰
も其昔佛蘭西の奈勃翁がエルバを嶽を脱け出てパリへ

帰りしが如也隆盛安くと薩児嶋へのがれ城下の北なる
る城山に疊を築き死を爰ぞ我が死に所と常よりは拵威
風凛々として在りしとは官軍是を見て軍令をきびしく
に其巡り一里二十七町四里に柵を結ひ巡らし十重廿
重に取巻敢て是を攻めおさること同月廿四日なり流石勇
敢剛傷の隆盛も兵粮弾薬こと〴〵尽きに至りては是
迄なりとあきらめ残兵を引まとめ最期の土器を廻らし
各〻討死と覚ごと極めとう然として切て出るに官軍方
も我劣らじと切て出合ハ互に入り乱れ此所彼此に寄
合せ駈合せ喚呼びてせんとする程に大小炮の煙塵

010190508132

ゝもうろうとして天色ど曇らせ血の雨車雷と流し興の声
馬てゝの音ハ九天ゝひゝ死金輪ゝくゝ山谷一時ゝ震動
して凄ドろんどもいゝ斗り無敵味方の屍畳〻として
堆の岡と築鮮血とうくとして数條の川とゝえり此
時隆盛ゝハ爰ゝ先途とまゝ天の荒れる如く四角八面
ゝ切り廻りうんうの如く官軍大小炮筒先ゝ揃へ雨霰と
と打出ゝ弾丸防ゝくく隆盛の運命寄る所ゝゝ怨魂ゝ
玉のけむりと共ゝ汚名ゝ世上ゝのゝ討死とゝゝハ
ゝうゝゝ時ゝ西郷隆盛行年四十六戈天保辰年の生
ゝ金骨逞く身丈五尺餘目方二十六貫有と云

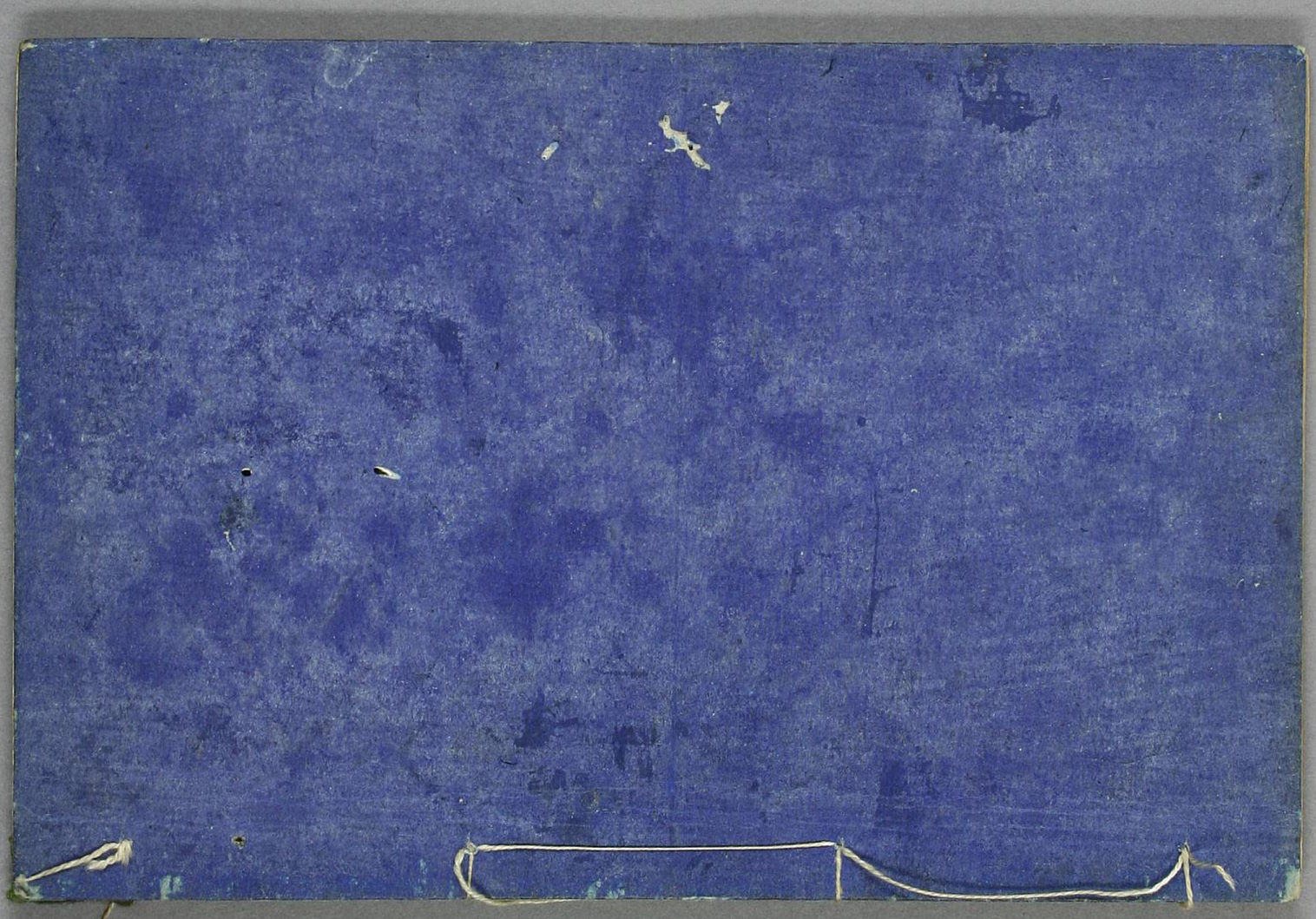
明治十年
月　日御届

東京

賣捌人　福田熊治郎　長谷川町千番地

著人　平民　羽田富次郎　第六大區小區本所外手町二十二番地

出版人　平民　浦野浅右工門　第十大區一小區寺嶋村四十五番地

賣捌人　平民　森屋治兵衛　馬喰町二丁目

賣捌人　平民　恵比壽屋庄七　照隆町